

望ある存続を目指して

特集・希望ある存続へ
「和歌山電鐵貴志川線の再生とこれから」

赤字ローカル線から

「地域の宝」へ。

2003年10月、南海電気鉄道は赤字が続く貴志川線の廃止検討を表明した。

これを受けて、地域住民は「貴志川線の未来をつくる会」など、さまざまな住民団体を設立。

それぞれの特徴を活かした存続運動を展開していった。

2005年2月、和歌山県・和歌山市・

貴志川町（現・紀の川市）は貴志川線存続で合意。

南海電鉄撤退後の運営事業者公募により、事業を継承することが決まった岡山電気軌道は、

同年6月に貴志川線を引き継ぐために新会社「和歌山電鐵」を設立。

地域住民、自治体と協働する運営体制で、

「貴志川線再生」に乗り出した。

赤字ローカル線から、住民が存続を熱望した「地域の宝」へ――

出典：「貴志川線再生計画報告書」廃線の危機から存続へ（2007年1月、貴志川線運営協議会）
辻本勝久（2012）「和歌山電鐵貴志川線の再生と今後の課題」（『運輸と経済』第72巻第8号）



2000年3月、鉄道事業法が改正された。鉄道事業への新規参入は免許制から許可制になり、事業遂行能力があれば鉄道事業への参入は自由にできるようになったが、鉄道事業からの退出も廃止予定日の1年前までに廃止届出を提出すれば、事業を廃止できることとなった。

この鉄道事業法改正をひとつの契機に、過疎地域や地方都市の経営難に苦しむ鉄道の廃止が相次いだ。存続が廃止か、揺れる最中の鉄道も少なくない。

貴志川線の年間旅客輸送量は1974年度の約361・4万人をピークに、年々減少が進んだ。自動車利用の普及とともに、路線と並行する幹線道路の整備・拡張が進み、さらに自動車利用が進展する。少子高齢化により定期利用客も減少の一途をたどっていった。

利用者が減少する中、南海電鉄は駅の無人化やワンマン運転など徹底した合理化を進めた。こうしたコスト削減努力が功を奏し、1995年度に約8億円に達した営業赤字は減少したが、2001年度以降の3年間はなお4〜5億円の赤字で推移している。

内部補助による路線の維持はすでに限界に達していた。03年10月、南海電鉄は和歌山県・和歌山市・貴志川町に対して、貴志川線の廃止検討を表明。翌年9月、鉄道事業法に基づく事業廃止届出を提出した。

行政による存続の議論、地域住民による貴志川線存続運動が始まった。

2003年

（黒字は事業者、赤字は行政機関、青字は地域住民の活動を示す）

10月下旬／南海電鉄より和歌山県・和歌山市・貴志川町に対し、貴志川線廃止を視野に入れた検討が伝達される。

11月7日／和歌山市長、貴志川町長が南海電鉄社長に営業継続を要請。

11月21日／NHKニュースで貴志川線の廃止

検討が報道される。

同日、県・市・町が対策協議会の設立計画を公表。

12月6日／「南海貴志川線対策協議会」（以下、対策協議会）設立総会開催。県・市・町、周辺自治体等が会員となり、貴志川線の存続を図る。行政と住民が一体となった存続運動推進を確認。

2004年

1月17日／第2回対策協議会開催。和歌山県高等学校校長会、信愛女子短期大学が新会員として参加する。

2月2日／対策協議会が「貴志川線存続」を求める署名活動を実施する（3月12日まで）。

2月3日／和歌山市自治会連絡協議会が、市政懇談会において、貴志川線問題を市全体の問題として取り組むことを決議。

2月12日／JR和歌山駅前街頭署名活動を実施。和歌山市長・市議会副議長・貴志川町長・町議会議長ら25人が参加。貴志川線の利用と存続運動の盛り上げを呼び掛ける。

2月13日／対策協議会が、貴志川線全駅にて、乗降客の利用状況調査ならびにアンケート調査を実施する。

2月22日／住民団体「貴志川町暮らしと環境をよくする会」（以下、よくする会）が、シンポジウム「南海貴志川線がなくなるってほんと？」を開催。

3月4日／貴志川町議会定例会において「南海貴志川線の存続を求める決議」が採択される。

12日に海南市議会、18日に野上町議会、22日に桃山町議会、24日に和歌山市議会において、それぞれ同決議が採択される。

貴志川線の再生と希



文◎香田朝子／撮影◎加藤有紀／写真提供：和歌山電鐵株式会社

3月18日／和歌山県高等学校校長会、PT

A、信愛女子短期大学が、貴志川線存続を求める要望書と約3万1000人分の署名を南海電鉄に提出。

3月30日／対策協議会が、貴志川線存続を求

める要望書と約25万6000人分の署名を南海電鉄に提出。

南海電鉄は「夏までに方向性を出したい」と、存続か廃線か、結論を出す期限を初めて明らかにする。

4月10日／住民団体「南海貴志川線応援勝手連」（以下、勝手連）が、ワークショップ開催。5月29日まで。

4月15日／対策協議会が、国土交通省（以下、国交省）を訪ね、経営不振などの鉄道路線に対する国の支援制度を新たに設けるよう要望する。

4月23日／県・市・町が、国交省近畿運輸局に要望活動を実施する。

4月26日／第3回対策協議会開催。2月に実施した利用状況調査・アンケートの結果が報告される。利用者の48%が代替交通手段を持っておらず、沿線自治体の貴志川線への支援については約9割が「支援すべき」と答える。

5月12日／国・県・市・町による「存続への検討会議」開催。

5月21日／国・県・市・町・南海電鉄による第1回「5者会議」開催。存続に向けた実務協議を開始する。

7月29日／和歌山市長が、既存の鉄道事業者が不採算路線を継承した事例として、三重県桑名市および三岐鉄道北勢線を行政視察。

7月30日／和歌山市長が、茨城県石岡市および鹿島鉄道を行政視察。存続の危機にある鹿島鉄道には、02年より5年間、親会社である関東鉄道による経営支援と、石岡市など沿線自治体・茨城県による公

的支援が行われる。

8月4日／第4回対策協議会開催。

8月5日／市民シンクタンクとしての性格を持つ「和歌山市民アクティブネットワーク」（以下、WCAN）が初代会合。後に、タスクフォースとして「貴志川線分科会」を設立する。

8月10日／南海電鉄が、県・市・町に対し、「貴志川線鉄道事業からの撤退」を表明。

9月2日／NHK総合テレビ「難問解決！ご近所の底力」で、貴志川線と沿線住民の存続運動が取り上げられ、全国的な反響を呼ぶ。

9月7日／市・町が、「南海貴志川線存続に向けてのシンポジウム」を開催。事業者・自治体・国交省の担当者が会し、沿線住民ら600人が参加。

9月22日／市が、市議会総務委員会、上下分離方式による貴志川線の存続や、バスを運行させた場合の収支シミュレーション結果を報告。バスに比べ、鉄道は「赤字額が大きい」が定時性、輸送力で優れている」と評価。一方で、上下分離方式や第三セクターに移行しても、年間2億円前後の赤字になることが明らかに。

9月30日／南海電鉄が、05年10月1日を廃止予定日とする貴志川線の「鉄道事業廃止届出」を国交省近畿運輸局に提出。

10月12日／WCAN貴志川線分科会が、沿線主要道路で交通量調査と所要時間調査を実施。

10月13日／勝手連が、「駅評価ワークショップ」を開催する。

10月22日／「貴志川線の存続と利用促進を願

う」を掲げ、沿線住民ら約1000人が署名を集め、国交省に提出する。

う県議会議員連盟」が、第1回勉強会を開催。県議や和歌山市長、貴志川町長、つくる会の代表ら40人が出席。

11月29日／国交省近畿運輸局で意見聴取会が開かれる。よくする会、つくる会、県・市・町が参加。

12月11日／つくる会が、住民フォーラム「乗って残そう貴志川線」を開催。沿線住民ら800人が参加する。

12月13日／市が、市議会総務委員会、上下分離方式による存続を目指し、南海電鉄撤退後の新しい経営主体を、05年1月にも民間企業から公募する方針を表明。

12月19日／勝手連が、竈山駅清掃イベントを実施。

12月20日／県立和歌山東高校の生徒・保護者・教職員、地域住民らが「和東高フォーラム」を開催。04年から開催する討論会で、そのテーマの一つに貴志川線問題を取り上げる。12月23日／つくる会が、駅の美化イベントを開始。

2005年

1月20日／WCAN貴志川線分科会が、「貴志川線存続に向けた市民報告書」存続の費用対効果分析と再生プラン」を発表。

1月22日／存続を求めて活動を続ける住民団体や識者が一堂に集まり、「貴志川線存続に向けた住民会議」（以下、住民会議）の初会合を開く。

2月4日／県・市・町が、貴志川線存続のための枠組みを合意。上下分離方式を採用し、県は鉄道用地取得費など初期投資と施設整備にかかる計約4億8000万円を負担。市と町は運営移管後10年間、上限8億2000万円を負担する。

2月13日／第5回対策協議会開催。

2月15日／第9回5者会議開催。新運営事業者確保に向け、協議を開始する。

2月23日／市・町が、運営事業者の公募を開始。①鉄道事業許可の取得②南海電鉄撤退の日から運行③10年以上の運営継続——が条件。公募は3月22日まで。

2月27日／南海電鉄が「貴志川線の日」を開催し、全区間一乗車につき初乗り運賃で乗車できるサービスを実施する。市と町はJR和歌山駅などで貴志川線利用促進キャンペーンを実施。つくる会も沿線マップを作成、配布する。

3月上旬／住民会議有志が、継承事業者に打診活動を行う。

3月14日／WCAN貴志川線分科会が、両備グループを継承事業者の筆頭と判断。つくる会に連名を求め、応募依頼状を送付。

3月26日／貴志川線運営事業者応募9者のプレゼンテーションを実施。

4月28日／市・町が応募9者の中から、両備グループの岡山電気軌道を選定。

5月7日／和歌山東高校、貴志川高校など沿線8校の生徒・学生が組織する実行委員会が主催し、貴志川町で「貴線祭」開催。「活気づけよう貴志川線・和歌者の力」がテーマ。

5月11日／岡山電気軌道の小嶋光信社長が、記者会見を行う。新会社を設立し、06年4月の運行開始を目指す。

5月20日／和歌山市長・貴志川町長が、南海電鉄に06年3月末までの廃線延期を要請する。

6月9日／南海電鉄が、国土交通相に半年延長の事業廃止繰り下げを届ける。

6月27日／岡山電気軌道が、貴志川線運営のための100%子会社、「和歌山電鉄株式会社」を設立。社名は公募で選ばれ、路線名の通称名には

「わかやま電鉄貴志川線」を使う。

10月16日／貴志川町で、貴志川線の存続を祝う集い「走れ未来へ貴志川線」開催。つくる会の主催で、会員ら750人が参加。

10月21日／第18回5者会議開催。11月7日／貴志川町が粉河町・打田町・那賀町・桃山町と合併。「紀の川市」になる。

地域住民の存続を願う熱意と地元自治体の支援を受けて、貴志川線を運営する「和歌山電鉄株式会社」が誕生した。

和歌山電鉄は「地域の意見・要望を反映させながら、地域とともに再生を目指す」ことを目的に、行政・商工会のほか沿線学校関係者、住民団体「貴志川線の未来をつくる会」や「和歌山市民アクティブネットワーク貴志川線分科会」などの代表を委員とする「貴志川線運営委員会」を設置。同委員会が運営の決定機関となって利用促進策などを協議、実施していく体制を整えた。「日本一心豊かなローカル線」を合言葉に、鉄道と地域が一体となった、貴志川線再生への取り組みが始まった。

2006年

1月20日／和歌山電鉄と南海電鉄が、国交省近畿運輸局に貴志川線の鉄道事業譲渡譲受認可申請書を提出。

2月28日／和歌山電鉄が、国交省鉄道局で貴志川線鉄道事業譲渡譲受認可を受ける。

3月18日／貴志川線沿線の住民代表、商工会、沿線学校（教員・保護者・生徒）、和歌山県・和歌山市・紀の川市と和歌山電鉄の役員からなる「貴志川線運営委員会」を和歌山電鉄組織に設置する。

3月31日／南海電鉄貴志川線最終運行日。4月1日／貴志駅前発着に合わせ「わかやま電鉄貴志川線出発式」が行われる。

5月28日／第6回対策協議会開催。

8月6日／和歌山電鉄創立1周年を記念して、貴志川線運営委員会主催の「第1回貴志川線祭り」が伊太祈曽駅・伊太祈曽神社で開催。沿線住民や鉄道ファン500人が参加する。

10月3日／和歌山電鉄が、「第5回日本鉄道賞」の「選考委員会特別賞」に選ばれる。廃止の届出がなされた貴志川線の再生が地方鉄道の再チャレンジのモデル事例になると評価。

10月21日／和歌山電鉄移管後初のダイヤ改定。増発と最終電車の繰り下げを行う。

2007年

1月5日／三毛猫の「たま」が無人駅の貴志駅駅長に就任。



2009年3月にデビューした「たま電車」

特集：希望ある存続へ

[和歌山電鐵貴志川線の再生とこれから]



1猫の顔をモチーフにした貴志駅 2「和歌山勲功爵」の称号をもつ「たまスーパー駅長」 3伊太祈曽駅長の「ニタマ駅長」 4わかやま電鉄貴志川線出発式 5子どもたちに人気の恒例「クリスマス電車」 6地域の行事として定着した「貴志川線祭り」

7月29日／水戸岡氏デザインによる改装車第2弾「おもちゃ電車」が運行開始。

11月7日／貴志川線の駅では初のパーク・アンド・ライド駐車場を伊太祈曽駅前に開設。

2008年

1月5日／貴志駅の07年利用者が対前年比10%増。この業績により「たま駅長」が「たまスーパー駅長」に昇進。

4月20日／貴志駅に「たま」駅長室が完成。

水戸岡氏のデザインで、改装経費は「たま」がDVDに出演した報酬で賄っている。

5月16日／フランスのドキュメンタリー映画

「ネコを探して」(ミリアム・トネロット監督)に、日本のネコであり、かつ職業を持ったネコとして「たま」が出演。日本でも10年に全国公開される。

10月28日／「たま」に、和歌山県知事より「和歌山県勲功爵(わかやまでナイト)」の称号が贈られる。

2009年

3月21日／水戸岡氏デザインによる改装車第3弾「たま電車」が運行開始。車両内外に1001匹の「たま駅長」が描かれている。

7月8日／「和歌山電鐵貴志川線・地域公共交通活性化再生協議会」が、地域公共交通活性化・再生優良団体として、国土交通大臣から表彰を受ける。

12月20日／つくる会が、結成5周年と和歌山電鐵開業4周年を祝う集い「ありがとう、もっと！ずっと！貴志川線」を開催する。和歌山県知

事、和歌山市長、紀の川市長をはじめとする多くの来賓と会員500人が参加。

2010年

1月3日／駅長就任3周年記念式典で、「たま」が和歌山電鐵の執行役員に就任。

8月4日／「究極のネコ・エコロジカル建築」をコンセプトとする水戸岡氏デザインの駅舎「たまミュージアム貴志駅」が完成。

2011年

1月5日／駅長就任4周年記念式典において、「たま駅長」の活躍に対し、和歌山県知事より「和歌山県観光まねき大明神」の称号が贈られる。また、海外の客招きのため、「国際客招き担当役」も同時に発令。

「たま」は常務執行役員に就任。「つくる会」が、さまざまなアイデアにより集客に努め、鉄道運営を継続しているとして、「第10回日本鉄道賞」の「ローカル線客招きアイデア賞」を受賞する。

2012年

1月5日／駅長就任5周年記念式典で、三毛猫「ニタマ」に「貴志駅長代行兼伊太祈曽駅長」任命の辞令が交付される。

2013年

1月5日／駅長就任6周年記念式典で、「たま」が和歌山電鐵ナンバー2の社長代理に昇進。